
楽園の薔薇

柚葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽園の薔薇

【Nコード】

N4969Z

【作者名】

柚葉

【あらすじ】

どこかの扉で繋がっている楽園。

その世界には闇を照らすために『薔薇』と呼ばれる人がいる。

でも、今回の『薔薇』はやる気なし!?

2人の護衛を連れて、いやでも仕事に行く。

そんな『薔薇』でも大丈夫…?

楽園の闇を照らす『薔薇』たちの、神秘的(?)な物語。

＊これは別サイトで私が「ふーちん」として書いている小説です。
盗作なんてことはないです。

プロローグ

楽園の薔薇

<プロローグ>

ある日。

僕は不思議な人を見た。

水色の目。

それに明るい茶色の髪。

その女の人は、野原で何かを唱え、扉を作った。

そして、その扉の中に入っていく。

扉の中はまぶしい光であふれていた。

そんなことが何日も続き、がまんしていた僕も思いきって話しかけた。

「その扉は何？」

と。

そうすると、その人は僕をびっくりした目で見つめた。

「あなた…、これが見えるのね！」

と喜びながら言う。

「あなたも、来る？ 楽園に。」

そう言って、僕の手を取ると、扉の中へ入った。

目を開けると、そこは自然が広がるきれいな場所。

「来てくれてありがとう。あなたには、この子を頼みたいの。」

「この子…？」

考えて、気付いた。

この子というのは、女の人のお腹にいる赤ちゃんのことだ。

「そこで、あなたに、今日生まれてもらうわ。」

その最後を聞くか聞かないかの時、僕の意識はとぎれた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「ソフィア」

その声に気付き、私は振り返る。

「ユニゾン」

「もう、終わったか？」

「ええ。今生まれたはずよ。」

その通り、建物にはどよめきがあった。

「あの子には、イスフィールの許婚になってもらうの。」

まだ生まれていないイスフィールをなでながら、私は目を閉じた。

「だからね、ユニゾン。あなたと、さっきの子…そうね、セイレーンにしましょう。その2人が中心になってイスフィールを守ってやって。この子は、この楽園にあるたった1つの薔薇なんだから。」
私の言葉に、ユニゾンは静かにうなずいた。

「たぶんイスフィールは元気な子になるだろうから、そのうち、もう1人あげる。…任せたわよ、セイレーン、ユニゾン。…イスフィール、あなたは、この世界の闇を出来るだけでいいから照らして。」
そして誰にもなくつぶやく。

「よろしくね」と。

1. 二分咲きの薔薇？

楽園の薔薇

1. 二分咲きの薔薇

< 1 >

「……。朝……？」

少女は寝台の上で首を傾げた。

「今日の天気は……。」

少し右にずれ、天井に着いている窓を見上げる。

ややあつて、嫌そうにつぶやいた。

「……晴れえ……？」

実は晴れの日が大のきらい。

「雨でも降ってくれりゃいいものの……。明日は逆さのてるてる坊主でもやろうかな。」

そういいながら、机の上のペンダントを手にとった。

これは、ルビーの粉で作られた、真っ赤な薔薇の形をしている。

この楽園にたった1つのものだ。

その時、ドタドタツと、外でものすごい音がした。

少女は慣れているようにため息をつく。

そして、首にかけたペンダントを握りしめた。

これは、『薔薇』と呼ばれる者たちの特別な能力だ。

握りしめると同時に、少女の身体から、淡いピンク色のオーラが立ち上った。

しかし、少女は何かを思いついたようにペンダントから手を離す。

「やっぱ、無視した方が良いのか？」

と、つぶやいた。

その時、部屋についている最高級の扉がものすごい音を立てて開かれた。

「僕の薔薇姫！元氣だったかい！？」

薔薇姫と呼ばれた少女は、額に青筋を浮かばせる。

扉を開けたのは、そこにいた少年だろう。

「セイレーン…。元氣だった？ですってえ？昨日も来ていたじゃないの！」

少女は無視すると決め込んだはずなのに、耐えきれず文句を言う。

少年——セイレーンは、満面の笑みを浮かべた。

「やだなあ、薔薇姫。一日で熱が出るかもしれないんだよ？」

「うるさい。私は年中ずーっと元氣です！」

少女の頭の中で、何かが切れる、ぶちっという音。

「だからあんたは…：薔薇姫って呼ぶなって言ってるでしょ…！！」

少女——イスフィールは大声で叫んだ。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

エプスタイン家。

それは、この楽園にある珍しい一族だ。

その家で生まれる姫は、たった1つの薔薇のペンダントを身につけることが出来る。

身につけた者は『薔薇』と呼ばれ、楽園の闇——悪いことを封じなければならぬ。

そして、今回の『薔薇』は。

「あーもうっ！帰ってよー、うっとうしいっ！」

エプスタイン・イスフィール。

「やだっ僕も言ったでしょー。」

イスフィールは、文句を言いつつ廊下を歩いていた。

遠い親戚で、許婚——婚約者のセイレーンと一緒に。

「なんで父様の所に行くのに、あんたもついてくんのよ。」
イスフィールの周りに、どよんとした空気。

「いいんだってば。ユニゾンさんは僕のこと、いてもいいみたいだし。」

話しているうちにユニゾン（父）の部屋についた。

イスフィールは、セイレーンの言葉を無視して扉を開ける。

「父様！入ったから！」

普通は『入るよ』ぐらいなのだ。

けれど、イスフィールは『入ったから』。

「お、来たかイスフィール。セイレーン君も入っていいぞ。」

セイレーンはその言葉を聞き、ほらねと言うように目を細めた。

さっきのイライラが残っているせいか、イスフィールは見ないふりをして席に着いた。

セイレーンも同じように席に着く。——もちろん、イスフィールの隣。

その光景を目にしたユニゾンは、こらえきれずに吹き出した。

そのまま大笑いをする。

そんなユニゾンを、イスフィールはものすごい顔でにらんだ。

「ユニゾン、いいから話を続けろ。と言うか、話し始めろ。」

全然気付いていなかったが、ユニゾンの後ろに人がいた。

1. 二分咲きの薔薇？

楽園の薔薇

1. 二分咲きの薔薇

< 2 >

「え、セイレーン…？」

その少年は、とてもセイレーンに似ていた。

イスフィールは自分の隣を見てみたが、そこにはちゃんとセイレーンがいた。

驚いた顔で。

天の助けとばかりに、ユニゾンは話を始めた。

「ああ、彼はレイアースと言ってね。セイレーン君と同じく、未来のここ——地球から来たんだ。ここの執事になってもら——」

「なんですってえ！！」

ユニゾンが最後まで言い終わる前に、イスフィールが立ち上がった。

「あのねえ、父様。私、執事とかいらないんだけど。」

「違うんだ、イスフィール。彼は、君の母さん——ソフィアが呼んだ人なんだよ。」

「…母様が？」

意外なユニゾンの言葉に、イスフィールは驚く。

「君は薔薇だろう？だから、その護衛もかねている。」

「それならセイレーンがいるじゃない。」

「…セイレーン君は確かにいい護衛なんだが、イスフィールが、その、元気すぎるんだ。」

「…あ、そ。」

「で、どうして、その、レイアース、だっけ？」

セイレーンはレイアース自身に確認した。

レイアースは小さく頷く。

「どうしてお前に似ているか、だろう？」

レイアースが自分でセイレーンの質問を口にした。

イスフィールは、そんな2人を見比べることしかできない。

「ああ、それはね。」

ユニゾンが口を開く。

「2人は双子だったんだよ。」

「「「ええー！！！！」」」

レイアースも含めて、3人で驚きの声を口にする。

「確かにそっくりだけど、双子って…。」

「ユニゾン。どっちが上だ？」

レイアースが聞く。

「上？」

「どっちが兄かってこと。」

セイレーンも同じようで、ユニゾンが分からなくなったところを説明した。

「そういうことか。それは…確かセイレーン君じゃないか？」

その言葉を聞くと、レイアースは嫌そうな瞳をセイレーンに向ける。

「何だよ、その目は！」

セイレーンは、レイアースが向けた瞳に、少し引き気味になりながら、反抗する。

「いや。」

レイアースは首を振る。

ふと、イスフィールが拳手した。

「あ、私も分かる、その気持ち。これが兄だったら、すごく嫌。」
イスフィールに『これ』扱いされたセイレーンは、頭が真っ白になる。

そんなことも全然分からないレイアースは、頷きながらイスフィー

ルの頭をくしゃくしゃとなでた。

（お、大きい…。）

レイアースを見上げて、思わず感じてしまう。

2人の身長差、約10cm。

「まあ、そういうわけだから。レイアース君、君はイスフィールのそばについていてくれないか？ 薔薇は命を狙われることも少なくない。」

真剣になったユニゾンの言葉に、イスフィールは反抗するのをあきらめた。

1. 二分咲きの薔薇？

楽園の薔薇

1. 二分咲きの薔薇

< 3 >

「で？フルネームでなんていうの？」

部屋につくと、イスフィールはレイアースを振り返り、そう聞く。

深い緑色の瞳。

紙はその瞳に似合わない黒だった。

そんな彼を見ていると、深い色に引き込まれるような錯覚を覚える。レイアースは、少し驚いたような顔をした後、目を閉じて吐息のようにつぶやいた。

「メイデン・レイアース」

「地球での名前は？」

またイスフィールが問うと、レイアースは少し考えるような顔になった。

「…覚えていない。というより思い出せない。」

そして、ふとレイアースが床に目を向ける。

「？」

「お前…薔薇のペンダント、つけてないのか？」

「へ？…あっ！あの時セイレーンに投げつけた後、すっかり忘れてたっ！！」

しゃがんで探し始めたイスフィールを見て、レイアースは思わず笑ってしまった。

「お前さあ…。普通投げたりしねえだろ。そんな大切って言われてるものを。しかも、護衛に向かって。」

イスフィールは、しゃがんだままレイアースを見た。
そして、また下を見る。

「大切だなんて思っていないもの……」

イスフィールがつぶやいた言葉は、意外な言葉だった。
エプスタイン家の人々は、薔薇のペンダントは神聖な物だと教えられてきたはず。

もちろん、イスフィールもそう教えられてきた。

それなのに、イスフィールは大切だなんて思うことなく、あるわけがない。

「なぜ？」

レイアースが問う。

イスフィールはやっと見つけたペンダントを握りしめて語った。

「だって、私はこれのせいで、ここに閉じこめられた。」

その言葉を聞き、レイアースの目が驚きで薄い緑色に変わった。

「私は薔薇だったから。……さっき父様が言ったとおり、薔薇は命を狙われるの。闇の人の手によってね。そのせいで、何もない真っ暗な部屋で、私は過ごすことになった。」

「でも、それって薔薇のせいじゃないんじゃない？……」

「薔薇のせいよ！だって、闇の人がいたって、薔薇じゃなかったら、そんな風に過ぎさなくてもよかったの！全部、薔薇のせいだもん……」

「
子供のようにイスフィールは繰り返した。

するとレイアースが、しゃがみこんでくしゃくしゃとなでた。

さっきとは少し違うような感情がこもっている。

「お前、やっぱり薔薇にそっくりだ……」

レイアースの目は少しうるんでいて、明るい緑色になっていた。

2. 「闇を光で」イスフィール大作戦!!?

楽園の薔薇

2. 「闇を光で」イスフィール大作戦!!

<1>

次の日。

イスフィールは、部屋に誰かが入ってくる気配を感じ、むくりと身を起こした。

「あ、起きた？」

一日でなじんだらしいレイアース。

彼がさっきの気配の犯人だ。

「…今日の天気…」

「あゝ？俺のこの姿見たら分かるだろ？雨だよ、雨!!」

確かにレイアースの服はところどころ濡れている。

イスフィールは安心して息をついた。

「どうした？雨の天気が好きなのか？」

レイアースが不思議に思って聞いた。

「うーんとねー。雨が好きって言うより、晴れが嫌い。」

「へー。変わってんなあ。」

理由はある人のせい。

「仕方ない」としか言いようがなかった。

と、その時。

昨日と同じようにガタガタツと外で音がした。

「ひっ…」

「ひ？」

レイアースが不思議そうに首を傾げる。

「レイアース!! 今日、本当に雨だね! うそじゃないでしょ! ?」
「降ってたよ、すごく。ほら、今だって雨音するし。」

イスフィールの焦りに、レイアースも思わずつられた。
ちなみに、どうしてあせっているかは不明。

そしてまた、昨日と同じように扉が壊れそうになりながら開かれた。

「薔薇姫♪遊びに来たよ。」

「セ、セイレーン!! 何で来てんの! ?」

驚きのあまり、部屋の隅っこに逃げる。

「なんでもなにも無いでしょー。だってここ、僕の家だし。」

当然のように言うセイレーン。

イスフィールが聞いているのは、実はそのことではなかった。

「じゃなくて! あんた、雨の天氣が嫌いだって言ってたじゃない!

「そーだっけ?」

「とぼけないで! 服が濡れるから嫌いって! なんになんでいんの?」

「月日がたつと、嫌いな物も変わるってことだよ、薔薇姫♪」

「なにそれ! あ、じゃあ好きな人も私じゃないのね!」

「いや、それはない。」

「えー!!!!」

意味の分からない会話が、レイアースに押し寄せる。

「ちょ、ちょっと待て! セイレーンが来てるのも分からないが!」

「∴レイアース君。今、僕のことを呼び捨てに∴!」

「はあ? どうせ双子だし。」

「双子でも兄は兄なんだよ。」

「信じてねえし。」

一刀両断。

「それにレイアースの方が大人っぽいし。」

イスフィールが続けた。

「イスフィール。僕のフォローしてくれないんだ〜」

わざわざ泣きまねを始めた。

「するわけじゃないじゃない。晴れの日ばかりやって来たりして、うっ

とうしいの！」

「なるほど。」

レイアースが小さくつぶやいた。

（そうかこれが「嫌いな理由」）

レイアースに心の中で『これ』扱いされたセイレーンは、気を取り直して、と立ち上がる。

なんとセイレーンには理由があったらしい。

「は？ 気を取り直して帰んの？ じゃーね。」

イスフィールがなんか冷たい気がする。

「ちがーう！ 君に仕事。」

「はぁ？」

2. 「闇を光で」イスフィール大作戦!!?

楽園の薔薇

2. 「闇を光で」イスフィール大作戦!!

<2>

「薔薇として、解決してもらいたいことがあるんだ。」
今までとはうってかわって、真剣なセイレーン。

イスフィールが不思議そうに首を傾げた。

「闇の人物か？」

レイアースも、緑色の瞳が驚きで薄くなる。

「そこはまだ。でも、暗殺されたのは確かだ。」

「暗殺!？」

イスフィールの反応が少し変わった。

「おっと、ついうっかり。」

「ふざけるなっ! :で、どこの奴だ？」

「街の方にあるラクリーン家。その当主とスズミって人。」

セイレーンは淡々と説明する。

「そうか :。あそこは気性が荒い家だからな :。ケンカとか、そー
いうので殺害ってのもありうる。」

レイアースも1人で考えている。

しかし、イスフィールの頭の中は真っ白だ。

(殺害って :。大変じゃない!)

「というわけで、イスフィール。詳しいことを調べてから向かう。
その間待機している。」

レイアースはそれだけ言うと、セイレーンとともにどこかへ行ってしまった。

「え…、ちょっと私は？」

イスフィールの声は、レイアースが閉じた扉に跳ね返り、部屋に響いた。

（あいつのことだから…。たぶん何かするだろうな。）

長い廊下を走りつつ、レイアースは苦笑した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4969z/>

楽園の薔薇

2011年12月19日21時47分発行